
離縁します！～小話集～

おこた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

離縁します！〜小話集〜

【Nコード】

N9765Y

【作者名】

おこた

【あらすじ】

この小話集は、「離縁します！」に感想を送っていただいた皆様へのお礼小話として作っていたものを、まとめてUPさせていたしております。タイミングを逃した小話や、お倉入りになっていた小話などもUPして行きますので、時系列、掲載順等は一切無視して頂けると嬉しいです。

目指すは・・・使い？

目指すは・・・使い？

妻「旦那さま、猛獣ですって」

夫「・・・」

妻「でも、旦那さまの場合は猛獣というよりも、ぬいぐるみですよ。髪もおひげもふさふさのふわふわで、ほっぺたに触ってもふかふかの感触ですし」

夫「・・・」

妻「肌に触れているというよりも、ぬいぐるみの生地に触れてるみたいですよ」

夫「・・・」

妻「あ、ということは、私ぬいぐるみ使いを目指せばいいんですね！」

よっしゃ、がんばるぞーっ！

と、勢いをつけてこぶしを振り上げた妻の後ろで、夫が自分のひげに手を当てて何やら考え込んでいたとか、いなかったとか。

目指すは・・・使い？（後書き）

こうして、おこたの妄想劇場が始まった、と（笑）

寝ぼけた自分とその顛末（夫視点）（前書き）

初の夫視点です！

寝ぼけた自分とその顛末（夫視点）

朝。

腕をとられる感触に反射的に相手を締め上げた。

いくら寝入っていたとはいえ、接触を許すなんて、以前なら決してしなかった油断。

自分の失態を自覚するよりも先に、接触した不審者を行動不能にするべく体が勝手に動いていた。

不審者は気づかぬうちに接触してきたとは思えないほど軽く取り押さえられ、柔らかな首に腕を押し当てただけで、抵抗どころか、身動きひとつしない。

・・・軽く？ 柔らかい？

寝起きではつきりしなかった意識が一気に覚醒する。

腕を押し当てた相手は、数日前に妻になったばかりの、女性だった。

すぐに気絶してぐったりとしている体を引っ張り起こして活を入れ、意識を戻させた途端にひどく咳き込む小さな妻。

その儚げな様子に、ひどく狼狽えて、小さな背をさする。
なんてことを。

危うく自分の妻を絞め殺すところだった。
触れられるまで接近に気づかないものにも、同じ寝台で休んでいるのだから、当たり前だ。

謝罪をしようと口を開きかけると、辛そうに呼吸を繰り返す妻が、

咳で潤んだ大きな目で見上げてきた。

言葉以上に雄弁に心情を語る妻の瞳に、疑問、驚愕、思案と次々に感情と思考の片鱗がよぎり、最終的に何かを決意したのが見て取れた。

「・・・今夜から、物置部屋で寝ます」

それから責めるでも怒るでもなく、淡々と物置部屋を片付けはじめ、昼に戻って来た時にはどこから見つけて来たのか、予備の寝具まで用意されていた。

妻は本気だ。

外に出て空を見上げると、この時期独特の暗雲が立ち込め始めている。間違いなく、夜が来る前に強い雨が降るだろう。風向きは西方。

それを確認して、家の外からちよつとした細工を施した。

その夜。

物置部屋の雨漏りと隙間風がひどいから、と妻はいつも通り同じ寝台で休むことを受け入れた。

・・・妻が俺に慣れるまで、細工を戻すつもりはない。

寝ぼけた自分とその顛末（夫視点）（後書き）

夫視点、需要があるかどうか分からず、とにかく書きたかったから書きちゃった小話でした・・・。

もしも夫と妻が童話の登場人物だったなら・・・（前書き）

童話の中でキャラ達に自由に動いてもらおうと思ったのですが、
よっと予想外のことが起きました・・・

もしも夫と妻が童話の登場人物だったなら・・・

？『赤ずきんちゃん』

配役

妻：赤ずきんちゃん

夫：オオカミ

妻「この配役、断固、拒否します！ どう考えても物語通りに赤ずきんが生き残れるとは思えません！」

夫「・・・」

妻「というか、旦那さま、赤ずきんちゃんのお話を知っているんですか？」

夫「（頷く）」

妻「え、じゃあ、最後にオオカミがどうなるかも？」

夫「（頷く）」

妻「・・・なんだか、もの凄く嫌な予感がするんですが。念のために、オオカミの結末がどうなるか言ってみてくれませんか？」

夫「満腹になる」

妻「なんで満腹で終わるんですか！？ いえ、ある意味、石で満腹になっているから合ってるのかも知れないですけど」

夫「（チラリと妻を見る）・・・」

妻「（ぞくつき、急に悪寒が・・・。だ、駄目です、オオカミが満腹満足で昼寝しているところしか思い浮かびませんっ！ すみませーんっ、物語チェンジで！！」

夫「・・・（妻に聞こえないように舌うち）」

？『シンデレラ』

配役

妻：シンデレラ

夫：王子様

妻「……旦那さまが、王子さま？」

夫「……」

妻「いえ、あの、私のイメージだと王子さまって爽やかでほっそりしてて、子供っぽいイメージがあるので。旦那さまの場合は、軍人さんとか狩人さんとかそういう力強くて厳しそうなイメージじゃないですか」

夫「……」

妻「衣装もなんだか旦那さまには小さそうですし。それに思ったんですけど、シンデレラが王子様を振り切ってうちに帰る場面、出来ませんよね？」

妻、まだ少し距離がある夫に背を向けて走り出そうとして、捕獲される。夫、ほぼ反射。

妻「ほら、やつぱり。離れててこれなのに、ダンス中の密着状態かなんて不可能もいいところです」

夫「……？」

妻「二人が出会うのは舞踏会ですから、ダンス中に鐘が鳴ってうち帰るんですよ、って、え、なんで衣装着始めているんですか、ちょっと、ああっ！？やつぱり王子様の衣装は旦那様には小さいですねってダメ、ダメです、そんなに無理にひっぱったら衣装が破けちゃいますよっ！？」

夫、妻に止められて王子様役、断念。

？『ロミオとジュリエット』

名場面のみ

配役

妻：ジュリエット

夫：ロミオ

妻「・・・う、うーん、これだったら場面が限定されていますし、大丈夫かな？」

夫「・・・」

妻「じゃあ、私はテラスに上がって、と。よし。旦那さまー、始めますよー、って、あれ？ 旦那さま？」

さつきまで、こちらを見上げてスタンバイしていたはずの夫がない。

妻「え、もしや私放置されちゃいまし・・・っ！？・・・えーと、旦那さま？ 壁を登ってきちゃったら、感動のシーンが、ただの逢引シーンになっちゃうんですが・・・」

息ひとつ乱さずにテラスの柵まで壁を登ってきた夫。

・・・結局、どの物語も始められませんでした。

もしも夫と妻が童話の登場人物だったなら・・・（後書き）

物語の枠の中で好き勝手動いてもらおうと思ったのに、まさか物語自体が始まらないとは・・・。

極秘任務：夫に無茶振りし、その反応を確認せよ！（前書き）

「妻（極秘部隊所属？）から無茶振りされたら夫はどうするか？」
がテーマ（？）です！

極秘任務：夫に無茶振りし、その反応を確認せよ！

夫には内緒で所属した私の部隊から、極秘任務状が届きました。
初めての任務です！

わくわくどきどきしながらその内容を読んだ私は、思わず、任務状を床に叩きつけてしまいました。

「夫に無茶振り」って、どんだけ無茶振りですか！？

それ、私がやるんですよね？

念のため、床に叩きつけた任務状の表書きを確認しますが、間違はなく私宛になっています。私にやれといっています。

ターゲットが夫という時点で、限りなく失敗に終わる気がしないでもないのですが。

とはいえ、これは任務です。部隊に所属している以上、任務は絶対に遂行しなければなりません。

夫にとつての無茶振りって、どんなことでしょうか？

さまざまな可能性を想定し、吟味し、私はいくつかの無茶振り作戦を用意しました。

作戦決行は、夫が帰宅した、その時です！

・・・夫が帰ってきません。

すでに普段の夕食時間を過ぎてしまっているのですが、夫が帰ってくる気配が全くありません。

なんなんでしょう、この物悲しさ。

すごく楽しみにしていたお出かけの日に大雨が降ってしまったよ

うな、このやるせなさは一体どうしたらいいのでしょうか。

せつかく、無茶振りをたくさん用意して待っていたのに。

覚書に書き付けた作戦計画書には、こう書かれています。

『夫への無茶振り計画！

？夫に晩御飯を作らせる！（胃薬用意）

？夫にギャグを言わせる！（ふとんがふつとんだー、的なの？）

？夫に一発芸をさせる！（宴会のネタ練習として）

？夫に歌わせる！（候補曲：『聖歌第24章』、『語れぬ物語』

、わらべ歌『隣の隣はだーれ？』）

？夫を爆笑させる！（わきの下が狙い目？）

・

・

・

？夫に恋愛本の一節を朗読させる！（候補：『愛の萌芽』P3

67、5行目）』

文字を追って小さくため息をつきました。

・・・夫が帰ってこなくて良かったっ！！

なんですか、この計画。一体誰が考えたんですか、いえ私が考えたんですけども。

いくら初任務で浮かれていたとはいえ、改めて考えると、これは無いです。

？の晩御飯を作らせるのも、いろんな意味で私の命にかかわってきますし、それ以外のどれもこれも、ある意味一番ダメージを受けるのは、私に違いありません。

この作戦を考えているときは、完璧な作戦群だ！と自画自賛し

ていたはずなのですが。というか、？にいたっては、夫が見て赤面してしまうような極めつけの台詞を搜して、一冊丸々読み込んだじゃっていましたし。

ノリって怖いです。

初任務を失敗どころか実行せずに終わってしまうのは非常に後ろめたいのですが、私の人生がかかっています。うん、任務状は見なかったことにしてしましましょう！

私は任務状をしまつて、夕食を作って食べ、先に休ませてもらうことにしました。

・・・ソファの上に、覚書を出しっぱなしにしていることを、忘れたまま。

翌朝。

朝に弱いはずの夫に、とても手の込んだ朝食を用意され、『愛の萌芽』P367、5行目からの文章を一字一句正確に暗誦された私は。

・・・絶叫を上げて逃亡し、捕獲されました。

極秘任務・夫に無茶振りし、その反応を確認せよ！（後書き）

クマさんは、意外とハイスpekだということが判明した一日。

7 夫を躰直します。爽やかにさせましょう。（夫視点）（前書き）

7話の夫視点です。

妻もいろいろ頭の中でしゃべっていますが、夫も結構いろいろたくさんです（笑）

7 夫を躰直します。爽やかにさせましょう。（夫視点）

最近、妻の様子がおかしい。

急に話しかけてきたり、わがままを言いだしてみたり。何か欲しいものでもあるのかと思えば、そうでもないらしい。

何か心配事でもあるのか、時々見られていないと思ったときに考えこんでいる様子なのが気になるが、その原因は口にしようとしな

い。

そんな様子のおかしい妻が、俺の風呂あがりにハサミと櫛と剃刀を手に待っていた。

にこにこめつたに見せないような可愛らしい満面の笑みで出迎える妻。その小さな手にはハサミと剃刀。

・・・なんだか、いろいろと残念だ。

妻が笑顔のままにじり寄ってくるところを見ると、どうやら、これらの道具一式は俺のために用意したものらしいことに気づいた。

とはいえ、剃刀はまずい。

小さな妻がハサミを持とうが包丁を持とうが全く気にならないが、剃刀はだめだ。

もし何かの拍子に俺が動いてしまったら、妻も無傷ではいられない。

ハサミや包丁なら、怪我をさせることなく取り上げることでもできるが、刃を直接もつ剃刀は、どうしても怪我をさせてしまう可能性

がある。

さて、どうやって妻の意識をそらせるか。

ぐるりと室内を見回し、目についた椅子を妻の前に引つ張つてきて、当たり前のように座らせた。そのままの流れで妻から道具一式を取り上げても、妻は大きな目を不思議そうに瞬かせて、おとなしく座っている。

最近のやり取りの中で気付いたが、妻は、小動物の子供によく似ている。好奇心が強く、臆病で。そのくせ、こちらが落ち着いて当たり前のようにふるまえば、それが当たり前なのか、と思い込む。多少の疑問は感じているようだが、拒否しない時点でこちらのもの。

無邪気な妻だ。

いつもまとめ上げている髪をほどいていくと、たつぷりとしたつややかな黒髪がうねりながら落ちてくる。

しつとりとした手触りの髪に、妻から回収した櫛を丁寧に通していけば、たったそれだけで、長い髪が滑らかに流れていく。

その感触を心地よく思いながら、ついだとばかりに妻に指圧を施してみた。

置いた俺の手が余るほど、薄い肩。

片手で指が回ってしまう、細い首。

指先だけで潰せてしまいそうな、小さな頭。

指圧が心地よいのか、うつとりと目を閉じていた妻の首から力が完全に抜ける。もう寝てしまったのか。

本当に、無防備な妻だ。

小さな体を抱き上げてやりながら、胸の内に、おかしさと慈しみともに、ほんの少しの苛立たしさが沸き起こる。こんなに何の警戒も無く寝てしまうなんて、よほど俺は信用されているのか。それとも、ただ、意識されていないだけなのか。

・・・それなら、いつそのこと・・・。

不穏な思考が湧き上がりかけたとき、腕の中で眠る妻が、頭を摺り寄せてきた。

無意識に甘えるような、その素振り。
起きている時には絶対にしない、その動き。

それと同時に、苛立ちと不穏な思考が、凶暴な何かとともに自分の中の奥深くへと戻っていく。

知らず詰めていた息を吐き出すと、丁寧に妻を寝台の奥側へ運んで、寝具をかけて、小さな頭をなでてから、寝室を出た。

居間に戻り、妻から取り上げた道具一式を片付けようとして、ふと、前に妻が言っていたことを思い出す。猛獣使いがどうの、という話をしていたときのことだ。

「髪もおひげもふさふさのふわふわで、ほっぺたに触ってもふかふかの感触ですし、肌に触れているというよりも、ぬいぐるみの生地に触れてるみたいですよね」

猛獣というか、ぬいぐるみっぽい。

人間以外のものに例えられることはよくあるが、生き物ですら無いものに似ていると言われたのは初めてだった。・・・しかも、ぬいぐるみ。

髪とヒゲがそう思わせるらしく、じゃあヒゲを剃ったら妻はどういう感想を持つのだろう、と思った記憶が蘇る。

別に髪もヒゲも気がついたら伸びていただけで、思い入れもないそろそろうつとおしくなってきたし、これからどんどん暖かくなっていくから防寒の意味でも必要がない。

少し考えてから、ハサミと剃刀を手にとった。

目を覚ました妻がどう反応するだろう？

驚くか、笑うか。

・・・朝が楽しみだ。

妻が目を覚ました気配で目が覚める。いつもなら起きてすぐに腕に触れて起こしにかかるというのに、今日はなかなか起き出そうとしない。

どうしたのだろうか？ とぼやける頭で考えたところで、いつも以上に、そっと、慎重に触れてくる小さな手。

感触を確かめるように何度か撫でられるのがくすぐったくて目を開けてみると、何かを真剣に考え込んでいる妻がいた。

その様子を眺めていると、やがて何かを決意したような顔になり、

ようやく目があつた。

思考から戻ってきた妻と目が合うと、一気に顔が真っ赤になっていく。

離れていく手の温かさが惜しくて反射的に捕まえた。

細い腕。

こんなに小さくて細くて壊れやすそうなものが、当たり前のように動いている。ほんの少し力加減を間違えれば、たやすく折れてしまいそうな腕。

そんな繊細なものが、どうして俺のように無骨な男のそばにあるのか不思議で夢を見ているような気もしたが、手のひらから伝わる少し低めの熱は確かに自分以外の温度。

もっとその温度を確かめたくて、捕まえた手のひらに顔を潜り込ませて息をつく。

温かい。

ヒゲを剃った分、直接温度を感じられるような気がして気分がいい。手のひらが次第に温かさを増していく。甘くて優しい、美味そ
うな香り。

「だ、旦那さまっ!？」

妻のあげた声に視線を向けると、真っ赤になった妻が困ったように眉尻を下げていた。

ああ、そうか。

「おはよう」

挨拶がまだだったな、と思い声をかければ、

「お、おはようございました！」

と、どこかやけくそ気味な返事が帰ってきた。

なんだか妙な挨拶だった気がするが、涙目になっている妻をみて、どうでも良くなった。挨拶が遅くなったから、怒っているのだろうか。腕を引っ張るような動きに、ああ、と思う。温かな手のひらから顔をあげると、妻がほっとしたように息をついた。

ちゅ。

ヒゲに邪魔されずに触れた妻の頬は滑らかで、唇にその柔らかさが直接伝わってくる。

ちゅ。

もう一度その感触を味わいたくて、すぐ反対の頬にキスを送る。真っ赤になっっている妻の頬はいつも以上に熱く、つい、それよりも赤く染まる小さな唇に目が行ってしまう。

そこは、こちらよりも熱く甘いのだろうか。身を屈めようとして、妻が頬を抑えて寝具に埋もれてしまった。

少し、遅かったか。

さきほどみた鮮やかな赤を諦め切れず、そういえばまだ妻からのお返しを受けていないことに気づいた。掴んだままの細い手首を引っ張ると、寝具の隙間から、チラリ、と妻が濡れた目を向けて来る。

ぞくり、と背中に駆け上がるものを必死になだめながら当たり前
のこのように、自分の頬を指で叩いて催促する。

妻の大きな瞳が驚いたように見開かれるが、ここで引いてはいけ
ない。

あくまで、これは当然の習慣なのだという態度で頬を寄せて待て
ば、真っ赤になって小刻みに震えながらも、そつと妻の唇が最後の
距離を埋める。

いつもと違う、直接肌に触れる、妻の唇。反対側の頬にも送られ
たその感触を噛み締めながら、心に誓った。

・・・これから毎晩、ヒゲを剃ろう。

7 夫を躰直します。爽やかにさせましょう。（夫視点）（後書き）

妻、狙われてる、狙われてる（笑）

これ、夫視点の連載を始めたら、そのまま転載しちゃうかも・・・。

妻、によによするの巻（前書き）

によによをテーマにしたら、こんな話が出来ました。

妻、によよするの巻

体の大きな夫用にと大きめのクッションを作ってみました。

元々夫の家にあったクッションも私にはかなり大きいのですが、夫にはちよつと小さいようでしたから。完成した新品クッションを両手で挟んでふかふかな感を堪能していると、ちようど夫が入って来ました。

あ。いいことを思いつきました。

「旦那さま、旦那さま、ちよつとこれ持ってください！」

「・・・」

「あ、そうじゃなくて、両腕で押さえるような感じで、そう！そうです！」

ソファに腰掛けた夫に完成したばかりのクッションの両端を腕で抱えるように、持たせてみました。

夫からちよつと離れて確認します。

・・・クマさんです。実家にいたクマさんのぬいぐるみそっくりなりアルクマさん（夫）がいますっ！！

元々よく似ているのですが、実家のクマさんは丸くてふかふかのお腹で、一方、夫は見るからに固そうな、柔らかさとは無縁の体つきです。

でも、こげ茶色のふかふかクッションを抱えた今の夫は、まさにクマさんっ！

うああっ、抱きつきたいです、そのふかふかなお腹の上で昼寝

したいですっ。

熱心に眺めて内心で身悶えしている私が不思議だったのか、夫がこてつと首を傾げました。

ぐはっ！？

最近よく見かける仕草なのに、なんですか、この破壊力っ！――瞬鼻血が出てくるかと思いました。

恐るべし、クッションマジック。そしてグッジョブ、私！

自分で自分を讃えていると、何を思ったのか夫がクッションを横に置いてしまいました。

ああっ！？ 私のクマさんがっ！

思いつきりがっかりしていると、夫はちょっと考えるそぶりを見せ、またクッションを抱え直しました。

クマさんです。クマさんが帰ってきました！

もしかしたらまたすぐにクッションを置かれてしまうかもしれないかもしれません。その前によく見ておかなければ、という使命感に燃えてにじりよると、その動きが夫を刺激したのか、素早くクッションから腕を伸ばした夫にあっさり捕獲されました。

何するんですか、これじゃクマさんが見れないじゃないですか！と憤りつつ体を起こそうとして、ふと、手のひらにふかふかな感触が。こげ茶色の、ふかふかクッションです。

・・・気持ちいい。

ちらり、と夫を見上げると、近くに置いていた本を手にとって読み始めるところでした。

あのー？ クッションも私も抱えられたままなのですが。

ああ、腕が長いから特に気にならないんですね。こんな大きなものの二つを全く気にしないなんて、さすが無い無い尽くしの夫です。

でも、まあ、夫が気にしないなら、もうちょっと堪能しましょうか。

クッションと夫の腕に挟まれた状態で少し身動きしてちょうどいい位置に収まると、私は大きく息をついて目を閉じました。

あったかくてふかふかで、心地よい昼寝の時間です。

結局。

大きなクッションは私の愛用品になりました。

・・・ときどき、リアルクマさんのおまけがついたり、つかないったり。

妻によりするの巻（後書き）

妻のによポイントは、やはりクマさんのようです（笑）

極秘任務2：夫を笑わせる！（前書き）

さあ、また極秘部隊から任務状が届きました。どうする、妻！？

極秘任務2：夫を笑わせる！

秘密部隊からまた極秘任務が届きました。

表書きは確かに私なのですが、見なかったことにしちゃおうかな、という誘惑にかられます。前回の夫無茶振り計画は、本当に無茶振りでした。あれは夫よりも私にダメージが・・・と、耳元で囁かれた夫の低い声を思い出しそうになって慌てて首を振ってその音を散らしました。

だ、ダメです！ あれは絶対に思い出しちゃダメです！！

熱があつまってくる顔を指令書であおぎながら、取り合えず、中身を見るだけみてることにしました。意を決して封筒の中身を開けると、たった一行。

「夫を笑わせる！」

・・・いまさらですけど、この指令書を発行しているのは、いったい誰なのでしょう？

どうしてこう毎回夫絡みの無茶振りしてくるんですか！？
夫の笑顔なんて、結婚してから一度しか見たことないんですよ！？
しかも、なぜ笑っていたのかわかりませんし。

・・・そういえば、夫はあの時どうして笑っていたのでしょうか？
会話を思い出しても、特に笑えるような内容でもなかったですし。
うーん、ダメです。夫の笑いのツボがわかりません。

でも、でもですよ。もしこれが発見出来れば、いつでも夫の笑顔が見れるようになるってことですよね？ それって、未来の奥さまと円満な関係を築くのにとっても重要なポイントです。無い無い尽くし解消にも役立つこと間違いなしですよ！

俄然、やる気が出てきました。夫の笑いのポイント発見計画、発動です！！

食後のまったりタイムに夫はいつも通り晩酌を楽しんでいます。ある意味、一番寛いで油断している時間帯。しかもお酒を飲んでいますから、笑いの沸点も低いはず。お皿を片付けるふりをして、夫の背後に回ってスタンバイ完了。

いざ、作戦決行です！！

「旦那さま！覚悟！」

手っ取り早く笑わせるとなれば、くすぐるのが一番！ 夫の脇に手を入れてくすぐろうとしたら、いつの間にか目の前に夫の無表情がありました。

・・・あれ？

なんで夫の顔が目の前に？

というか、どうして私は夫の膝の上に抱えられているのでしょうか？

頭に「？」をたくさん浮かべて固まっていると、夫が首を少し傾けました。

ああつ、これが髪とヒゲを整える前なら、首かしげクマさんだったのにつ。

思わず悔し涙を流しそうになったのですが、夫が少し目を細めて私を見ているのに気づいて、固まりました。

・・・三割増しで野生化したクマさんが首をかしげると、どうしてか、こう、身の危険を感じるといっつか、狙われているような気がしてしまうのですが。

き、気のせいでしょうか、気のせいですよ、気のせいだと思います。

慌てて夫の膝から降りようとして、それよりも早く靴を取られてしまいました。なんで靴を脱がせるんですか。嫌がらせですか。

こうなったら、再攻撃あるのみです！

うりゃっ、と夫の脇に手を伸ばしてコシヨコシヨコシヨコシヨとくすぐりました。

どうだ！？と夫の様子を伺うと、目を瞬かせて不思議そうにしています。

あれ？

効かないんですか、私の必殺くすぐりの刑。

兄弟たちにこの刑を執行したときは、いつも大笑いしながら土下座の勢いで謝ってきたものなのですが。

なんだかちょっと負けたような気分になりつつも、諦めきれずに膝小僧をコシヨコシヨとくすぐりますが、やっぱり無表情のままです。

何てことでしょう。夫は稀に存在するくすぐりが聞かない人物だ

ったんですね。

計画、失敗です。

というか、よく考えたら、笑いのツボってくすぐったい場所って意味じゃないですよ、そういうええ。

ちえー。といじけて夫の膝から降りようとして、がっしりと足首を掴まりました。

え。なんで足を掴むんですか、相変わらず全く動かせないんですがどうやって掴んでるんでしょうか、というか離して欲しいのですがつ！

嫌な予感に背筋に流れる汗を感じつつ、夫の表情をうかがって、私はビクツと震えて固まりました。

獲物を前にした獰猛な狩猟動物のような目をした夫。その口元には小さな笑みが。

だ、旦那さまが笑いましたっ！
二度目の快拳ですっ！

嬉しさのあまり飛び上がったのですが、同時にひどく落ち着かない気分になりました。

夫がじつと私を見ているその視線に、むずがゆいような、逃げ出したくなるような、目を逸らしたいような、けどもつと見ていたいような、とても複雑な感覚に襲われます。

身動き出来ないのに、心臓だけがどんどん早く動いて、熱がでそうで、焦りました。

も、もしかして、これが世に聞く色気というものですか!?

前は大好きなクマさんみたいだった笑みが、どうして今回は色気たっぷりの微笑みになっちゃったんでしょうか。やっぱりボサボサな髪とぼうぼうのヒゲという名の緩衝材がなくなってしまったからでしょうか。実に惜しいです。

そんなことをつらつらと考えていたら、夫が掴んだ足の裏をくすぐり始めました。

っ!!

反射的に起きる笑いを堪えながら悲鳴を上げて身を擦って逃げようとしたのですが、相変わらず全く脱出出来そうにない安定感です。この人間安全ベルトめっ。全然安全じゃないくせに、詐欺です!

さんざんくすぐられ息も絶え絶えになった私は、半泣きになりながら土下座の勢いで降参する羽目になりました。

ある意味、夫を笑わせるという任務は成功しましたが。

・・・秘密部隊の指令は、もうこりこりです。

極秘任務 2：夫を笑わせる！（後書き）

任務に成功しても、結局夫に負けてしまう妻なのでした。
そして、夫はめっちゃ楽しんでます（笑）

夫による妻観察日記（前書き）

お出かけしましょう？の夫視点のワンシーンです。

夫による妻観察日記

花待ち／火兔／2日

妻は最近よく裁縫をしている。

掃除や料理をしている時以外は、たいてい針を手に持って、なかなかの速さでひと針ひと針丁寧縫っていく。

一昨日までは薄い青、その前は紺色。

見るたびに違う色合いのものを縫っていたから何を作っているのか、気になってはいた。

お似合いですよ！ と誇らしげな笑顔を向けてくる妻に、今自分が着ているものが、妻が縫っていたものだを知った。

俺のために、妻が手作りの服。

薄手の服なのに、いつもよりも暖かな気がする。まるで少し体温の高い妻に包まれているような……。

そう思った途端、妻のように顔に熱が集まるのを感じて慌てて背を向けた。

出発を促しながら、そっと生地に触れる。

賢妻の勉強会は嫌いだが。

……たまには、二人で出かけるものいいかもしれない。

夫による妻観察日記（後書き）

夫は攻めるのは強くても、予想外の攻めに弱いタイプかも（笑）

初めてのお使い、初めての・・・（前書き）

書類上夫との結婚が成立した数日後のお話です。

初めてのお使い、初めての・・・

夫の家にはじめてきたときに、なんて何にも無い台所なんだろう、と呆然とした記憶があります。

調理道具はもちろん、食材もなし。

かろうじて台所にあるのは、コップとお皿が数枚。

この人、いままで一体どうやって生きてきたんでしょうか。

一緒に来ていた保護者の奥様が、すぐに調理器具や食材など必要最低限のものを用意してくださったので、それで今まで凌いできましたが、そろそ小麦が足りなくなってきました。

お野菜などは庭である程度採れるのですが、新鮮な卵や、ミルクもほしいところ。

それに、私、この家に来てから、まだ一度も街に戻っていないんですよね。そろそろ、女性ならではのこまごまとしたものも買い足しておきたいところです。

そこで私は夫になった方にお買い物に行きたい、と切り出してみました。

「小麦が切れそうなので、お買い物に行きたいのですが」

夫が頷きました。行ってきていいんですね。良かった！

お金は、保護者の奥様から非常用と、当面用の二種類に分けていただいたものがあります。結婚祝いとしていただいたものなので、ありがたく、二人分の食費として使わせていただきますしょう。

街についてからどういう風に回るか、なにを買おうか考えていると、夫に紙とペンを渡されました。

見ると、上のほうに「小麦」と書かれています。

あ、忘備録ですね！

卵に、ミルク、お塩、お砂糖、果物、お庭では採れない野菜など、街で売っているかどうか分からないものも、とりあえず希望として書き込んでいきました。

食料に関してはこんなところでしょうか。

ある程度書き出したリストを眺めて忘れていたものが無いか確認していると、さつ、とそのリストが夫に取られてしまいました。

夫はざっとその内容を確かめると、それを自分の内ポケットの中へ。

「・・・え？ あ、旦那さま。それ、私のお買い物用に書き出したものなんですが」

「・・・これを買ってくればいいのだろう？」

まだ他に何かあるのか？ といわんばかりに聞き返してくる夫に、思わず絶句してしまいました。

あ、当時の夫も無口でしたが、必要最低限のこれくらいの文章は話してくれていたんですよ？ 今なら3分の1以下の「買ってくる」で会話終了です。

今ならそんなにしゃべったことに感動ものですが、当時の私は夫の無口さに慣れるのが手一杯で、その短い会話文の中から必要な情報を取り出すのがやっと。

なので、言われた意味を理解した私は、思いました。

・・・女性ならではの必要品を書き出す前でよかった！！

「あの、私が自分で買いに行きたいんですが」

「・・・じきに茶会が開催される」

なんとなく、無駄だらーなー、と思いつつ、一応主張してみると、よくわからない回答が帰ってきました。

お茶会については、奥様から、結婚後も必ず出席するように言われていますし、確かにそろそろ結婚後初の開催時期ですけどねども。

つまり、それまで我慢しろ、と？

お、横暴です！ 買い物ぐらいいいじゃないですか！ 私だって、新鮮な食材を自分の目で選んだり、いろいろ街の中を見て歩きたいです！

と、とつさに脳内で激しく夫に抗議したのですが、口に出しては言いませんでした。

だって、ちょうど夫がソファにゆつたりと腰掛けたかと思うと、こてっ、と首を傾けたところだったんです。

ク、クマさん降臨っ！！

その体勢はズルいですが、反則ですっ！

焦げ茶色のフカフカ感といい、首の傾け具合といい、本当に実家のクマさんにそっくりすぎですよっ。

思いつき机に突っ伏してバンバン叩きたい誘惑に駆られますが、ここはぐっと我慢です。

もちろんクマさんに怒鳴ったり、抗議したり出来ませんし、そ

れよりも抱きつこうとする体と、勝手に動きそうになる手をとめるだけで精一杯です。

それに、良く考えると、小麦やミルクって結構重いですよね。そのほかの食材に、さらに割れやすい卵となると、私一人で持ち帰るのは困難を極めるに違いありません。となると、夫の申し出に甘えて、買ってきてもらったほうが安全です。

自分用の雑貨については、それこそお茶会の中でも十分間に合いますし、どうせなら一人で買い物するよりも、友人と一緒に見て回ったほうが楽しそうな気がします。

うん、そうですね。

「じゃ、お願いしますね、く……旦那さま」

というわけで、買い物はクマさん（夫）にお願いすることにしました。

その夜。

約一年分の小麦に絶対に飲み切れない量のミルク、一体何羽の鶏に産ませたんだという卵など、その他、馬車にぎっしり詰まれた食材の数々が届けられた私は。

……初めてクマさん（夫）に、こんこんと説教をしました。

初めてのお使い、初めての・・・（後書き）

夫 ↓ 「大は小を兼ねる」タイプ。

この時はまだ、二人分の食材の適正量が分かっていなかったようです（苦笑）

壁側で寝かせるそのわけは（前書き）

「早寝をさせましょう」後のある夜を、夫視点でお送りします。

壁側で寝かせるそのわけは

妻が眠そうだ。

そろそろ限界に近づいているのか、縫い物の針を何度も刺しそうになりながら、ちらちらと視線をよこしてくる。

・・・潮時だな。

手入れをしていた商売道具を片付けると、妻も嬉しそうに裁縫道具を片付け始める。その様子を横目で見ながら寝室に入り、寝具の中に入って目を閉じれば、それほど間をおかず妻が布団の中に入ってきた。

妻の視線を感じつつ、目をつむったまま一定の呼吸を続けていると、やがてかすかに聞こえてくる妻の呼吸も同じように浅く規則正しいものに変わっていく。

さらにしばらくそのまましていると、妻が動き出した。

やはり、今夜もか。

横向きになって目を開ければ、さっきまで腕に触れていた妻の体が狭い寝台の中を外側へ向かって転がっていくところだった。ぬくもりが離れていく。

すぐに端まで行き着いた妻は、絶妙なバランスで寝台から落ちはしないものの、そこで落ちそうで落ちない、ぎりぎりの綱渡りのようなバランス芸が披露されている。

初めてこれを見たときは、まさかそんな状態で本当に寝ているとは思わず、そんなに俺と寝るのが嫌なのか、と呆れるとともに少し攻撃的な気分になったりもしたが。

ただ寝相が悪いだけだとわかったときには、それはそれで微妙な気分だった。

いつものように、妻を起こさないように起き上がり、絶妙なバランスでふらふらしている肩を軽く引つ張って寝台の奥側へ転がす。

大人しく転がって行った妻は、壁まで行き着くと、しばらく壁に張り付いていたが、また転がってくる。

待ち構えていた腕の中にまで転がってきた妻をそつと抱き寄せると、しばらくもぞもぞ動いていたが、やがて大きく息を吐いて、大人しくなった。一度場所が落ち着けば、再び転がりだすことはない。

この一連の動きを完全な睡眠状態で行うのが、妻だ。

最近では、壁側で寝るのが好きだという、妙な誤解のせいで外側で寝たがるようになったから、ほぼ、毎晩この動きが行われている。

ただ、起きた時に自分が壁側になっただけでも気にしていないようなので、妻が寝入った後で遠慮なく転がすことにした。

誤解が解ければ、妻が寝入るのを待たなくてもいいのだろうが、その誤解を解くわけにもいかないし、ちょっと押せば寝台から落ちてしまいそんな妻をそのままにしておくわけにもいかない。

結局、妻転がしは毎晩続いている。

・・・朝、寝台にいない妻の温もりの名残を求めて奥側で寝ていることは、秘密だ。

壁側で寝かせるそのわけは（後書き）

こうして、妻は毎晩ころころ転がっていると。
毎朝起きると、奥側で寝ているのはこういう訳でした（笑）

妻と夫のカード勝負（妻視点）（前書き）

もしも、妻が夫にカードゲームで勝負を挑んだら、どうなってしまうのか！？

妻と夫のカード勝負（妻視点）

「旦那さま！ 私と勝負してください！」

いつもの夕食後のひととき。未だに何に使うのかよく分からない道具の手入をしていた夫に、いきなり勝負を申し込みました。

夫はチラリ、とわたしの方を見たのですが、またすぐに手元に視線を戻してしまいます。いつものことながら、きかなかったことにする気ですね！？

「だーんーなーさまっ！ 私と勝負してくださいっ！」

さっきよりも大きな声で、はつきりきっぱりお願いすると、夫が小さく息をついてこちらに視線を戻しました。おっ、聞く気になってくれたようです。

「勝負は、これです！」

用意しておいたカードを突きつけると、夫が少し不思議そうに瞬きをしました。どうしてそんなものが家にあるんだ、と思っえますね？ このためにわざわざ友人宅まで行って借りてきたんですよ。

友人はカードゲームやボードゲームの類が大好きですからね、たくさん持ってました。その中で一番絵柄がきれいだったものを借りてきたんですが、そういえば、友人が本当にそれでいいのか、と何度も聞いてきたのですが、どうしてだったんでしょう？

まあ、とにかく私は『リービス』と呼ばれるカードゲームを夫

に突きつけています。

「旦那さまはこのゲームをやったことがありますよね？」

こくり、と頷く夫に、私はしてやったり！ とほくそ笑みました。

「じゃ、もし私が旦那さまに勝ったら、私のお願いを聞いてくださ
いね」

宣言すると、夫がまたちよつと首を傾げました。

それからおもむろに自分を指差します。自分が勝ったときはど
うするんだ、ですね？ そんなの、決まっています。

「旦那さまは経験者、私は未経験者。これは旦那さまが勝つて当然
のゲームなわけですから、旦那さまが勝つてもご褒美はなしです！」

ズルイって言わないでくださいね。

私は今、友人に詰め込んでもらったルールを思い出すだけで精
一杯の状況なんですから。しかも友人いわく、たぶん夫は強いだろ
う、と。そんな人を相手にご褒美制なんか取り入れたりしませんよ！

夫はしばらく何かを考えていたようですが、やがて、手のひらを
私に向け、伸ばした5本の指をゆらゆらと動かして見せました。反
対の手は頬に当てています。

む、むむ。

これは5回勝負という意味でしょうか。

「いいでしょう！ 受けてたちます！」

自分から勝負を申し込んだことも忘れて、意気揚々と受けてたちました。

その結果。

あつという間に、4連敗。

絵柄を揃えるだけのゲームなのですが、夫の手元には次々と良いカードが集まり、私のほうはちっとも揃いません。

どうしてですか、そんなに運が無いんですか、私。

ちよつと落ち込みそうになりましたが、負けませんよ！

まだ最後の大勝負が残ってます！

・・・惨敗しました。

もうつ！ なんなんですか、このカード！

私との相性悪すぎです！

ぶーぶー文句を言っていると、夫が手招きで呼んでいます。もしかして、もう一勝負してくれるのでしょうか？

わくわくしながら近づくと、素早い動きで夫が立ち上がり。

かぷ。

・・・か、かまれたあああつ！！！！？

歯は立てていないので、いわゆる甘がみつてやつですね、っていうか、いきなり何してくれちゃってるんですか、この人はっ！？
私のほつぺた、まだちゃんとありますよねっ！？

かまれた頬を押さえて、思いつきり動揺していると、満足気な夫が椅子に座りなおし、またカードを切り始めました。

真っ赤になつて立ち尽くす私に、夫がまた5本指を動かし、反対の手はあごをゆっくりと撫でています。

も、もしかして。

次は、あご？

声に出して聞いたわけでもなかったのに、夫は私に大きく頷いて見せました。

それを見た私は、自分の心臓のために潔く敵前逃亡を図ろうと脱兎のごとく逃げ出したのですが。

あっさりと捕獲され。

・・・夫のカードゲームの強さを、いやというほど、思い知らされました。

妻と夫のカード勝負（妻視点）（後書き）

こうなっていました（笑）

夫と妻のカード勝負（夫視点）（前書き）

飛んで火にいる・・・？

夫と妻のカード勝負（夫視点）

「旦那さま！ 私と勝負してください！」

いつもの事ながら、突然妻が言い出した。最近はどうも夕食後の時間が狙われることが多いな、と思いながら、聞かなかったことにしようと手にしていた商売道具に視線を戻した

「だーんーなーさまっ！ 私と勝負してくださいっ！」

一段と気合が入った声からして、これは相手をするまで引かない気だな。仕方が無い、とりあえず話を聞いて、おかしいことだったら、別のことに意識を向けさせればいいだろう。まだ手入れが終わっていない商売道具をひとまず脇に寄せて、妻に視線を向けると、ひどく意気込んだ表情でカードを突きつけられた。

「勝負は、これです！」

妻の小さな手のひらに丁度納まる大きさのそのカードには見覚えがあった。

賭け事に良く使われる、『リービス』だ。

どうしてそんなものが家にあるんだろうか。俺の持ち物でないことだけは確かだ。

「旦那さまはこのゲームをやったことがありますよね？」

もちろんあるので頷きながらも、妻がやけにいい笑顔になったのが少し気になった。それにしても、『リービス』なんてどこで覚えてきたのか。鍛錬所の連中から何かよからぬ噂でも吹き込まれたの

か、とも思ったが。

「じゃ、もし私が旦那さまに勝ったら、私のお願いを聞いてくださいね」

・・・そうでもないらしい。

妻は意気揚々と勝負を申し込んできて、かつ願い事があるという。だが、その願い事をかなえるためには、勝たなくてはならない。つまり、勝つ気にいるということだ。

自分が勝ったときのことを考えているということは、俺が勝つたら？

「旦那さまは経験者、私は未経験者。これは旦那さまが勝って当然のゲームなわけですから、旦那さまが勝つてもご褒美はなしです！」

・・・やっぱり、鍛錬所の連中が何かいったのだろうか？
しかし、それにしても妻が勝つ気にいるようだし。

すこし考えてから、妻の反応を見るため、わざと何も言わずに頬を触りながら、反対側の指を動かしてみせた。

「いいでしょう！ 受けてたちます！」

妻は少し考えたあとで、意気揚々と受けてたってみせた。

ということは、やはり鍛錬所の連中からはなにも聞いていないらしい。

もし聞いていれば、俺に『リーバス』で勝負を挑んできたりしないだろう。

このゲームは、いわば、いかさまの腕を競うゲーム。

おそらく妻は気づいていないが、賭けの対象についても、妻はすでに了承している。

表面的なルールしか知らないらしい妻が勝つはずもなく。

4連敗までは、残念がったり悔しがったりしていたが、5連敗目には、カードを床に叩き付けそうな勢いで、憤慨していた。

いろいろ文句を言っているが、そのどれもが俺ではなく、カード自体への苦情だというのが面白い。

どちらにしても、負けは負け。

カードを置いて手招きをし、何の警戒心も無く近寄ってきた妻を腕に囲い、頬に顔を寄せて。

かぶ。

本当は少し歯を立ててやろうと思っていたのに、あまりにも柔らかく、皮膚の薄そうな感触に、なぜか慌てて甘噛みに変えた。

柔らかくて、温かい。

すこし舌に触れたすべらかな肌の感触と味に、満足感を覚える。

もう一度、味わいたい。

熱でも出したように真っ赤になって立ち尽くす妻に、もうひと勝負申し込む。

驚きで大きく目を見開いている妻が、今度はちゃんと賭けの対象が何かも気づいたのがわかった。

次は、その小さなあごを。

大きく頷いて見せると、反射的に逃げ出す妻。それをこちらもほぼ反射的に捕まえて、ゲームの続きを楽しんだ。

・・・妻は、甘い。

夫と妻のカード勝負（夫視点）（後書き）

何勝負させられたのかは、夫次第（にやり）

妻が早朝に目覚めたら（前書き）

夫視点にするか妻視点にするか悩んで、結局妻視点にしてみました。
夫がなにを考えているか、皆さんにはばれてしまいそうな気がします（笑）

妻が早朝に目覚めたら

その朝は、たまたま早くに目が覚めました。

隣では夫が眠っています。

困りました。

ひどく喉が乾いているので、水を飲みに行きたいのですが、いつもよりも早い時間ですし、夫は非常に気持ち良さそうに寝ていて、なんだか起こすのが申し訳ないような気がします。

かといって下手に起こしたら、私の命に関わることは、体験済み。

でもとっても喉が乾いています。

ということは、夫を起こさないように寝台から降りる方法をみつけなければいいということですね！

私は取り敢えず起き上がってじっくり考えてみました。

計画？

夫をまたいで降りる。

……残念ながら、足の長さが足りません。夫は寝台の端ぎりぎりまで身体が来ているので、夫をまたいで床に足をつける前に夫を潰してしまえますね、却下です。

計画？

足元の方から降りる。

棚がなければ降りれるのですが、棚の上を伝って行くわけにもいきませんし。そういえば、この棚を移動させれば、こんな風に夜に起きたい時に便利ですね。今度夫に相談してみましよう。

計画？

比較的高さが無い足側から飛び降りる。

これも足元の床が悪くなっていなければ可能なのですが、その部分の床は私が足を掛けただけでギシギシ音を立てるので、飛び降りたら床が抜けるかもしれません。危険です。

その後、???と計画を立ててみたのですが、どれも不可能で、結局寝ている夫をいつもの通り、起こすしかありませんでした。

その朝の朝食の時に夫に棚を動かすか、床の修理をお願いしたのですが、夫は利便性と普通に歩く分には問題ないということで、却下しました。

・・・私が起床するには、夫を起こす以外に道はないようです。

妻が早朝に目覚めたら（後書き）

もちろん夫妻の家は、全て夫による計画的設計&配置&仕掛けです
（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9765y/>

離縁します！～小話集～

2011年12月19日10時49分発行